『高城（耳川）戦跡探訪』で学んだこと

林　寅　喜

（会員　佐伯市中の島）

(一)　現地研修

五月八日、同行の会員十人と昨年の「佐伯惟治没落の日向路（北浦・北川両町）探訪」に続き、今年は天正六年（一五七八）十一月十二日向高城（耳川）において、大友・島津の両軍が雌雄を決して戦った際、空しく戦場に散った十二代惟教・十三代惟真父子の戦跡を木城町の現地に訪ねた。

探訪は事前に町教育委員会より資料等取り寄せ、手元の歴史書からも関連した部分をコピーして配布し、車中では学習しながらの旅行であった。

佐伯を発って十号線を南下すること二時間半、十時三十分頃川南町の宗麟原供養塔に着いた。周辺はよく整備されていて説明板など申し分ない。

塔は屋形に覆われて高さ二㍍余り、台石の上に四角形の竿石・蓮弁の中台・六地蔵を浮き彫りにした六角形の身部、宝珠を頂いた六角形の笠石から成り、笠石には次のように刻まれている。

千時天正十三年　　大施主

（正　面）謹奉訓誦大乗妙典一千部為戦亡各霊

二月彼岸日　源有信　山田信介

（右側面）迷故三界城　悟故十方空

（左側面）本来無東西　何処有南北

（背　面）諸行無常　是正滅法　生滅々己　寂滅為楽

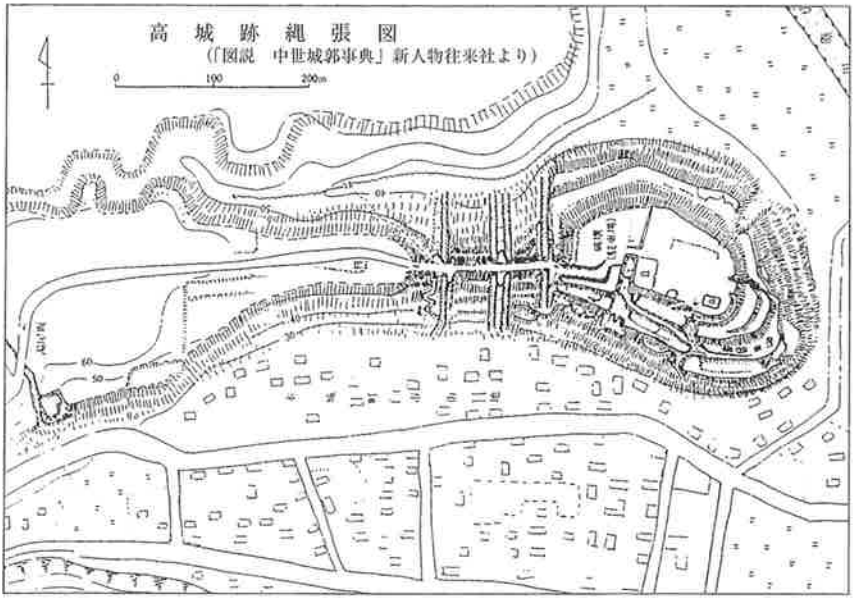
宗麟原供養塔

(註)これは現地に備え付けた記帳箱の中にあった、町教委の説明書から転記したもので、佐伯史談に掲載されていた内容とは多少違う部分がある。

塔は天正十三年二月、高城主山田信介が両軍の死者七千人を葬ったという円墳を背にして、南に戦場を望んで建てられており、円墳は一面樵木に覆われていた。

高城趾は比高（平地との高低差）が三十㍍位で、それ程急峻な山ではないが頂部は広い。もっとも、城趾の後方に当たる西方向は峰続きで日向山地に連なり、幾重もの掘り切りによって遮断されていたようである。この城を中心にして両翼の山上に、大友・島津の大軍が布陣して激戦を展開した。この地勢を初めて五万分の一図で見た折り、佐伯市堅田の宇山城趾一帯と実によく似ていると思っていたが、こうして現地の城趾に立って見て、その思いを一層強くした。但し、規模だけは及ぶべくもないが。

現在の高城趾から見渡せば、右に耳川（現小丸（おまる）川）左に切原川の奔流が望まれ、遥か下流で合流している。ところが資料によれば天正の頃は、耳川は途中から左に大きくカーブして、城趾から東南東に凡そ一・七、八㌔の地点で右折してきた切原川と合流していたという。これを思うと規模こそ違え、宇山城趾から見た堅田・大越両河川の流れと実によく似ている。



また、大友方の武将田北鎮周・佐伯惟教・田原親貫等が布陣していた場所を、西から東へ上城江下・下城天徳寺附近、同じく城八幡山を置き変え、島津方の義久・義弘・興久などの陣地を泥谷（ひじや）佐土原・小泥谷（おひじや）・柏江興国寺辺と想定すれば、戦場と戦闘の状況を頭の中に描きやすい。

さて、この戦いでは両軍共に約四万の大軍を擁して激突したが、大友方は作戦の不手際から島津方の戦略（釣り野伏せ戦法）にかかり、耳川を渡河したところで側面を衝かれ、総崩れとなって敗退し、その多くは逃げ場を失って淵にはまり、厳寒の水中で溺死したという。

(註)合戦のあった十一月十二日を現暦になおすと一月一日に当たり、兵士が着けていた具足の重量は約十キロもあったから、その影響も見逃せない。

この合戦以後、天正十五年秀吉によって制覇されるまで、日向は島津の勢力下にあった。

現在の小丸川は改修工事が完了して川幅は百六十メートルに整備されているが、天正の昔は流れに任せて築堤などしないから、至る所に淵や深みがあって川幅も一様ではなく、場所によっては倍以上あったかも知れない。

※参考

上岡の庄屋文書から、享保年間には番匠大橋の附近で、現川幅の一・五倍以上あったことを確認している。

(二)惟教（十二代）のこと

この戦いで、大友方は佐伯惟教・惟真父子を始め、名だたる武将が討ち死にし、務志賀（延岡市無鹿）に進出していた宗麟は戦わずして豊後に逃げ帰った。

ところで、この時惟教は一体何歳であったのだろうか。記録を見たこともないので分からないが、壮年の頃伊豫に亡命中彼の地に残したとされる緒方惟照（後年白木の城代となる）と、栂牟礼城に残していた惟定との関係を探りながら解説して見たい。そこで次に惟教の主な経歴を記すと、

・天文十九年（一五五〇）二階崩れの変。

このあと宗麟が二十歳で家督を継ぐ。

・弘治二年（一五五六）五月、惟教は嫡子惟真他一族を連れて伊予に亡命し、黒瀬城主西園寺氏の庇護を受ける。これは在地土豪と大友麾下の氏姓対立事件に先手を打ったとされているが、惟教は関与してい

なかったという。

・永禄十二年（一五六九）三月、豊後に帰り烏帽子岳城（佐賀関町）に入る。

・同年十二月、梅牟礼に帰城。

・元亀二年（一五七一）伊予の西園寺公広と土佐一条兼定の争いに宗麟の命を受けて出陣。

・元亀三年（一五七二）由原宮大神宝会文書に署名。この前後から大友家の同紋衆として待遇されている。

・天正五年（一五七七）入道して宗天と号す。

・天正六年（一五七八）九月、日向出兵により同年十一月十二日高城において一族と共に戦死。

右の経歴で、注目したいのは入道して宗天と呼ぶようになった時の年令ではないかと思う。これを私は五十歳半ばと見ている。すると、高城で戦死したのは一年後であるが、強いて言うなら平均寿命が現代とは比較にならない位短かった時代だけに、体力的に考えても戦場に出て行ける年令としてはギリギリの線ではなかったかと思う。そこで蛇足かも知れないが、慶長五年関ヶ原の合戦に直接参加した武将と、剃髪して入道となった人達の年令を別記した。

・東軍の武将

井伊直政　三十九歳
本田忠勝　五十二歳
福島正則　三十九歳
藤堂高虎　四十四歳
細川忠興　三十七歳
小早川秀秋　十八歳

・入道となった武将

武田信謙　永禄二年　三十九歳
大友義鎮　永禄五年　三十三歳
上杉謙信　天正二年　四十五歳

右の合戦で、負け戦の中家臣に守られて敵中を横断し、無事薩摩に逃げ帰った島津義弘（高城合戦の時は四十三歳）と、本田忠勝を除き他はみな五十歳以下である。

合戦は野戦も籠城戦も双方共に死力を尽くす。ことに野戦の場合はより強靭な体躯と智力が要求される。そう考えると、惟教が高城で討ち死にした時の年令は武将として戦場に赴くことの出来る限界ではなかったろうか。

そこでこの年令を五十五歳前後と仮定して時代を遡ると、大友家の同紋衆として認められた頃は最も油の乗っ

・西軍の武将

島津義弘　六十五歳
宇喜多秀家　二十七歳
石田三成　四十歳
大谷吉継　四十一歳
真田信行　三十四歳

た五十歳代で、さらに遡れば伊予に亡命したのは三十歳以後となるから、大友一門と対立した他姓衆に加担したとしても不思議ではない（但し、惟教は関与していなかった）血気盛んな年頃である。

㈢惟真（十三代）のこと

そう考えて見ると、惟教が伊予に亡命した時伴ったとする二人の子、惟真と惟忠はまだ子供であったことになり、伊豫で生まれたとする惟照（緒方姓）を惟真の子とするのはいささか早計である。以下その理由を述べて見たい。

旧宇和記によれば、伊豫に亡命後西園寺氏の庇護を受けた惟教の嫡子惟真は、野村の城主宇都宮乗綱から知行四十五貫を給されたという。これを後年の石高に換算すると分かり安いが一概には言えないので、当時知行の見返りに課せられていた軍役について調べて見た。これによって惟真の家中における位置付けが判断できるからである。算出は史談一七三号の拙文「佐伯氏の貫高と動員兵力について」のP32を参考にして行った。すると三内至四人という極めて低い数字となる。これは惟真が当時子供で、しかも庇護されていたため捨扶持として給された。としか考えざるを得ない。そこで仮に惟真が伊予に亡命した時、十歳前後（惟教二十四、五歳の子として考えた―参考―）であったとすれば、豊後に帰ったときは二十二、三歳で、高城での戦死は三十歳を越えた働き盛りとなる。

惟真墓　龍護寺境内

※参考

戦国大名に嫡子（長男）が誕生した時の年令調べ

大友氏――義長―24　義鑑―28　宗麟―28　義統

織田氏――信長―23　信忠―24　秀信（三法師）

武田氏――信玄―17　義信

25　勝頼―26　信勝

北條氏――早雲―54　氏綱―29・氏康―23

氏政―24　氏直

㈣惟照のこと

惟照は惟真の子というが、伊予で生まれたのか、佐伯で生まれて伊予に伴われたのかよく分かっていない。後年、緒方姓を名乗っているところから妾腹であったと考えられ、惟教退去の時、母共々西園寺氏に預け（人質）られたことになるが、何歳であったか分かっていない。

天正七年（一五七九）乗綱の推挙によって、宇都宮公広より与治兵衛尉に叙任されたが、これは惟教が伊予に亡命した弘治二年から数えて二十三年後、伊予に残されてから十年後となる。そこで叙任を

㈠十八歳の時とすると永禄四年の生まれとなるから、

その時、

惟教は三十八、九歳　（伊予在住五年目）

惟真は十四、五歳　（　〃　）

㈡二十歳の時とすると永禄二年の生まれとなり、

惟教は三十六、七歳（伊予在住三年目）

惟真は十二、三歳　（　〃　）

㈢二十三歳の時とすると弘治二年の生まれとなり、

惟教三十三、四歳　（伊予に渡った年）

惟真は十歳前後　（　〃　）となる。

惟照が叙任されたという天正七年は、高城合戦の翌年である。惟教は前記の経歴でも分かるように、元亀二年（「佐伯氏一族の興亡」では三年頃とする。）宗麟の命を受けて土佐の一条兼定を助け、西園寺公広を攻めている。

戦国の習いとはいえ、これは過去の恩義に背いた仁道に悖る行為である。したがって、人質として公広に預けられていた惟照は反噬者の一族として冷遇された。つまり元亀二年から天正七年までの八年間は戦功があっても認めて貰えず、惟教の死後ようやく容認されたとすれば、叙任された年令は二十歳以後としか考えられないから、惟教の子とする公算が益々大となる。

惟照墓
野村町安楽寺墓地

このあと惟照は天正九年の戦さにより惟真の遺領四十五貫に十貫文が加増された。

このように推理すると、惟照は惟教の子（妾腹）として佐伯で生まれ、伊予に伴われたとするのが妥当と私は考える。もし惟照が惟真の嫡子であったとすれば、人質は弟惟忠に代え、萬難を排して豊後に連れ帰ったであろう。それを敢て残したことからして、その出自はこのように考えざるを得ない。なお、惟照は元和元年（一六一七）に死亡した。

㈤惟定（十四代）のこと

惟定は大友改易後藤堂高虎に仕えて四千五百石を給され、元和四年（一六一八）六月伊勢の津で死亡した。年令は分かっていない。

惟定は高城戦の時、僅か十一歳（佐伯郷土史）で戦には参加していなかった。しかし、天正十四年（一五八六）の堅田合戦の時は十八歳（大友三代侍附）になっていたというから、これが正しいとすれば五十歳（行年）で死亡したことになるので、生まれは永禄十二年、惟真が伊予から帰還した年になる。

㈥まとめ

以上惟教の最後を五十五歳前後と仮定して試算したが、もし六十歳代であったとしたら、恐らく隠居して惟定を守り、戦場には赴かなかったであろう。それを敢えて出陣したとするならば、惟真・惟忠が晩年の子で、若年のため後見として出て行かざるを得なかったとしか考えるより外はない。そうすると惟照が惟真の子であるとする説は益々望み薄となる。

以上数字を並べて物理的に解明して見た。こうしないと、只史書に書いてあるからそうだということだけでは、納得できない性分だからでもある。

【参考図書】

歴史群像
佐伯氏一族の興亡
佐伯郷土史
大分歴史事典
日本人物総覧
東宇和郡沿革史